

# 歴史から学ぶ「福山」

# 郷土の きょうどのいじん — 第26回 — 偉人たち

皆さんが暮らす福山には、  
かつて偉業を成し遂げた多くの先人がいます。  
今では忘れられた、郷土にゆかりのある  
偉人たちを紹介します。



豊年製油の広告  
(写真提供：鈴木商店記念館)



執筆  
ナカエフエムふくやま  
専務取締役 局長  
田中 宏行  
(福山市立御幸小学校  
幸中中学校出身)

## 豊年製油(現・J-オイルミルズ)中興の祖

※中興の祖とは、危機的状況に陥ったものを再び興して盛んにした人。

杉山金太郎は、1895(明治27)年に和歌山県海草郡川永村永福(現・和歌山県和歌山市永福)の農家に生まれました。紀州藩徳川家の徳修学校を出ると、叔父が教師をしていた尋常中学福山誠之館(現・福山誠之館高校)を受験し、1年に編入。その後、家庭の事情で大学進学を諦め、4年進級時に誠之館を退学し、市立大阪商業学校(現・大阪公立大学商学部)に入学しました。

1894(明治27)年に商業学校卒業後、金太郎は、得意の英語を活かして神戸の外国商社「アメリカン・トレーディング・カンパニー(米国貿易会社)」に入社し、貿易実務に習熟。初めて綿糸を中国に輸出し、日本の綿糸輸出の先駆けとなりました。1907(大正6)年、貿易の権を外国から日本人の手に取り戻そうと、日本綿花(現・双日)社長喜多又蔵とともに、中外貿易会社を設立。当初は業種も純粋調でしたが、第一次世界大戦後の不況(戦後恐慌)で会社が倒産の危機に瀕し、金太郎は私財の全てを負債の一部に充てて辞任しました。その後は、戦後恐慌の影響を受けた横浜正金銀行(現・三菱UFJ銀行)の仕事を手伝い、1923(大正12)年、大蔵大臣・井上準之助の依頼で、帝都復興院の嘱託となり、同年に起きた関東大震災の復興資材の確保に力を尽くしました。

## 近代的製油工業の先駆者 “Soybean King(大豆王)”

# 杉山金太郎

すぎやま きんたろう (1875-1973)

1924(大正13)年、鈴木商店の大番頭、金子直吉と親交のあった井上準之助らの推薦で、戦後恐慌で台湾銀行の手に渡っていた総合商社「鈴木商店」の整理のため、同社三大事業の一つ「豊年製油(現・J-オイルミルズ)の社長に就任」。金太郎は、自ら満州州に向出して豊富な大豆を買い付けするなど、陣頭指揮を執るとともに商品開発と販売力を強化し、経営難で台湾銀行の管理下にあった会社を見事に立て直しました。

食用油は、大正時代まで菜種油やごま油が主流でしたが、金太郎は豆特有の臭いがある大豆油の精製法を研究させ、におい、色、味のよい食用の大豆油を作り出しました。また、丸大豆から油を搾り出した残りの豆かす(脱脂大豆)にタンパク質が多含まれることに着目。それを「肥料用」た脱脂大豆を畜畜の飼料に使い、家畜の排泄物を肥料に使うという「一石二鳥策を考案。次に、醤油や味噌、豆腐を作るのに油は不要と考え、それまでの丸大豆ではなく、脱脂大豆を原料に使うようになりました。さらに、大豆に含まれるタンパク質を原料とした合板接着剤を開発するなど、大豆を無駄なく多面的に利用することに成功。会社発展の礎を築きました。

1942(昭和17)年、化学工業技術の発展と食生活の向上のため、財団法人「杉山産業化学研究所」を設立。さらに同年、資源の少ない日本がアメリカに対抗するには人材の育成が急務と考え、私財を投入し財団法人「杉山報国会」を設立。返済不要の奨学金を支給しました。奨学生の中には、ノーベル物理学賞受賞の江崎玲於奈がいます。

アメリカで「Soybean King(大豆王)」と呼ばれた金太郎は、「豊年製油中興の祖」として、わが国の近代的製油工業発展の途を切り拓きました。



写真提供：杉山産業化学研究所/杉山報国会